

尊敬すること

京都大学文学部 3 回生 吉浪優香

「自分の将来の目標を決めるために、一度自分の目でアフリカを見てみたい」、
そんな思いで、今年の夏、私はケニアに 2 週間滞在した。

実際に行ってみて一番感じたのは、「そこには人の生活がある」ということだった。日本にいるときは、「アフリカでは 1 秒に〇〇人の子供が命を失っています」とかいった文句をよく聞いていたが、実際にケニアに行くと、目を覚まし、朝ごはんをつくり、仕事や学校に行き、恋をして家族のことを想って・・・そんな当たり前の日常がそこにはあった。自分のなかに勝手に作り上げていたアフリカ像が、毎日のようにガラガラと音を立てて壊されていくのが分かった。

何より、一番の思い出は 5 日間に及ぶホームステイであった。「世界ウルルン滞在記」並みの経験をそこではした。お風呂もシャワーもなく、手渡された桶に入った少量の水で体を洗い（髪は 5 日間あらわなかった。）、ガスがないので薪を拾ってきて、子供たちと火を起こし、おかあさんといっしょに仕事場に行く時、バイクタクシーも乗り合いタクシーも捕まらなくて結局 3 時間歩き・・・とてつもなく不便で、とてつもなく疲れる毎日だった。だが、その一方で、近所に家にお母さんに連れられて行けばどこに行っても歓迎され、「今日はうちの家に泊まっていきなさいよ!」「今、チャイ入れてあげるから!!」「ムズング（スワヒリ語で「外人」の意）!!ハロー!!!」と気軽に声をかけて 5 秒で誰とでも仲良くなれる人々に出会った。肌の色が違うからとか、何言っているかわかんないからとかで、のけ者にしたり、煙たがったりせずに、違いを認めて、その違いがどこから来るのか知りたがり、いつまでも質問攻めにする・・・そんな好奇心旺盛で、元気なケニアの人々に私は魅了されてしまった。

「貧しい人を助けない」そんな思いで、アフリカで将来働きたいと思っていた。しかし、助けることが重要なのではない。「自分たちでできる」そう感じてもらえることがアフリカのパワーを引き出すことにつながるのではないか。

お世話になった NPO 道普請人の喜田さんに教えていただいた話が頭をよぎる。喜田さんは 20 代の時に青年海外協力隊として、アフリカに初めてやってくる。そこでの仕事はタンザニアの山岳部に住む民族のコーヒー栽培の手法を調べて報告することだった。しかし、何日経ってもなかなか仕事は進まない。ある日、その部族の族長が喜田さんのいた村を通りかかった。「族長に聞けば何かわかるかもしれない」そこで思い切って直談判し、族長と話す場をセッティングしてもらえることになった。1 時間くらい、コーヒーの栽培について話したあと、族長は若い喜田さんにこう聞いた。「喜田、お前はアフリカのその仕事で成功したいか？」喜田さん「はい!」族長「そのためにはどうすればいいか、わかるか?」「わからないです・・・教えてください!」「では、私たち黒人が色の白い人間に一番されてないことは何かわかるか?」「・・・わかりません。なんですかそれは?」「それは【尊敬】されるということだ。もしお前がアフリカで成功したいなら、黒人を尊敬し、存在を尊重し、共に生きていくという姿勢で仕事をするのだ。そうすれば多くの黒人とお前は仕事ができるだろう。」

「尊敬する」ということ。そして「共に生きる」ということ。そんな当たり前の姿勢を国際協力分野で仕事をしたい、と考えていた私は失っていた。そして、今もその姿勢で国際協力をしている人は少ないのではないか？日本にいるときに漠然と感じていた「アフリカが必要としているのは本当に【援助】なのか?」という疑問と完全にリンクした。アフリカの人々が必要としているのは【援助】ではない、【尊敬】なのだ。

今、私は日本に帰ってきてアフリカの思い出と自分の将来について思いを巡らしながら、この文章を書いている。目下の目標は「自分自身の力を付けること」にした。アフリカの人々と尊敬し合いながら仕事をする前に、まだまだ自分でやれること、やらなければならないことがある。そう感じた。ホームステイ先のお母さんとの約束「またケニアに戻ってくるから!そしたら、お母さんの家にまた泊めてね!!」この約束を実現するのはいつになるかわからない。だが、その時の自分は学生としてではなく、尊敬という行為によってアフリカの人たちとつながり、ともにその将来を切り開いていける人間でありたいと思う。



1：ホームステイ先、ウルルン滞在記を覚悟した。



2：大好きなチャパティとチャイ。



3：ホームステイ先の子供たち。
後ろの薪で火を炊く。



4：道直しの様子。ここまで毎日2時間歩いた。



5：ホームステイ先のママ。強い。



6：ホームステイ先の子供たち。全員集合！



7 : スラムと子供たち。後ろはゴミ山。



8 : サファリにて。この瞬間だけ、はしゃいでいた。



9 : マトマイニチルドレンズホームで働く、スラムのママたち。